

青年期の無気力傾向と自己愛における対人意識および友人関係との関連

- 心理的距離をめぐる葛藤とその対処に着目して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
山口 義弘

近年増加が見られる，大学生の留年・退学や若年者の職場不適應の一因として，青年期における無気力傾向の強まりが示唆されている。特に大学生を中心とした無気力症に関する先行研究では，周囲との関係への援助を通じた介入方法が提唱されているが，一方で治療者や他者との関係を形成，維持することの困難さが多く報告されている。また，無気力症に陥りやすい青年の特徴として，自己に対する強い誇大感を抱きながらも，対人場面で自己を表出することに過敏で不安を抱きやすい，自己愛的な対人意識を有することが指摘されている。自己愛に関しては友人関係との関連についてさまざまな検討が行われ，自己愛的な対人意識が友人との適度な心理的距離をめぐる葛藤をもたらすことが示唆されている。社会的環境が大きく変化する青年期において，友人関係は無気力症への援助的な役割を果たし得る一面をもつと考えられる。そこで本研究では，自己愛における対人意識が無気力傾向に影響を与え，その過程に友人との距離感をめぐって生じる葛藤とその心理的対処が関連していることを仮定し，因果関係の構造について検討を行った。

大学生，大学院生を対象に質問紙調査を行い，使用尺度の分析を経て，仮説にもとづいた共分散構造の作成と検討を行った。自己愛的対人意識のうち過敏的な側面をもつ「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」は相関関係にあり，両者は「無気力感」と，友人との「距離を縮めることへの葛藤」，その心理的対処反応として「相手に対する萎縮」に正の影響を与えていた。また，「自己顕示抑制」は葛藤により生じる「自己防衛感情」を介して，無気力感における「他者不信・不満足」に正の影響を与え，「承認・賞賛過敏性」は葛藤に対する心理的対処反応として「相手への自己確認」に正の影響を与えていた。自己愛におけるこれらの対人意識は他者の目線を意識することによる，自己表出へのためらいや羞恥を表し，友人や他者とのかわり代で生じる自己の傷つきへの懸念が，自己と他者に対する無力感，不信感などをもたらしていることが明らかになった。

一方，誇大的な側面をもつ「自己主張性」は「無気力感」と「相手に対する萎縮」に負の影響を与え，自己愛的対人意識の中には，相手に気兼ねなく意志を伝えられる，自己，他者への信頼という，無気力状態を低減する側面があることも明らかになった。

以上のことから自己愛における対人意識の中でも，他者からの評価や反応に依拠して自己を捉えようとするのが，無気力傾向や，友人との葛藤に対する消極的な対処反応の生起に影響を与えていることが確認された。そして，誰かの目線を通してではなく，率直に自分自身を捉えることができるように働きかけることが，自他への不信や無気力を緩和し，また友人との適度な関係を維持する上で，相手との間で生じる葛藤を積極的に解消しようという意識を高め得ることが示唆された。